# 信毎歌壇

## 小島　なお選

ストーブに灯油足すたび臭ふそのにほひ恐竜の体臭なりと　（長野市）原田　浩生

「言った通りやればできる」と先生の言葉を信じ注連縄できぬ　（長野市）山田登志夫

マレットのコースを外し野小便すれば浸み込む白砂の中　（松本市）降旗　悦二

紅茶のドロップス陽にかざし見る黄昏をポンと口に放り込む　（千曲市）宮川　惠子

古代米の藁で編みたる大相撲の土俵の俵は伊那谷で編む　（豊丘村）はやしのもりんど

受刑者の書道教室一時間七言絶句を黙黙と書く　（須坂市）青野　等

「舞姫」の悲恋のくだりにクラス湧き高三の我ら純朴だった　（小布施町）市村　憲彦

クリスマスイヴの難題公平にホールケーキを五等分する　（小諸市）池田　真弓

このハガキ63円長野まで届けてくれる郵便うれし　（松本市）清沢　和江

見えぬ眼に思わず見上ぐ冬空に百舌鳥の高啼く声の響けば　（千曲市）上原　博司

佳作

小豆粥は十メートルの竿となり赤い実をもて灯りをともす　（松川町）小川　陽子

1千の百層ビルの起工式神職御祓　不思議も無いか　（長野市）松本　博人

選評

第一首、冬の灯油の粗雑な油くささから、太古の恐竜の体臭へ。ダイナミックな直感と発想の力に打たれた。第二首、言われた通りやればできたのだ。まさか、と思うこともまずは信じるところから。第三首、落胆と自暴自棄の野小便だろうか。下句の淡々(あわあわ)とした観察の描写ににじむ心理。第四首、紅茶色のドロップは黄昏(たそがれ)の空の色を閉じこめたよう。「ポン」の軽さで空を飲み込む。

## 米川　千嘉子選

広島の娘の友からの礼状を撮りてラインで東京の娘に　（麻績村）塚原ふじ子

山鳥を撃つ猟銃の音聞けば戦火の止まぬ国を思いぬ　（豊丘村）はやしのもりんど

耳元に「どこか行きたい所ない？」とたずねれば父は畑と答う　（飯田市）安江　恵子

都会ではアップルのスマホにスイカ持ち畑ではなく駅に向うと　（泰阜村）松島　房子

部屋中におでんの匂いああ今日もよいお年をと言うのを忘れた　（松本市）堀内　悠子

亡き妻が重石になってくれたのか野沢菜漬けに水上がりたり　（長野市）せきたつお

ゆらゆらとスワンボートの傾げたる雪降り渡る昼時の諏訪　（小諸市）加藤　陽介

村よりの一万円の商品券三千円足し土鍋買ひ替ふ　（麻績村）小山みよ子

嫁入りの爪掛けの下駄あらわれて変わりし今世夢のごときに　（伊那市）松崎りつ子

しおりひも最後のページにないときに読んでないのかと孫に問われし　（千曲市）関　津和子

佳作

また会えた「かいけつゾロリ」の新作にブックサンタになったおかげで　（松本市）川村　聡子

妻が押く遠藤大師に睨まれておどろおどろし深夜の帰宅　（長野市）河口　武矩

選評

第一首、娘への礼状が作者の家に届いたのを撮影してラインで届ける。現代の心のやりとりのニュアンスが軽やか。第二首、1発の猟銃の音でさえすごいのに。そのはるかかなた、戦争の激しい銃撃音が止まない。第三首、一番安らげて、しかも日々の変化の鮮やかな面白い場所が畑なのだ。第四首、アップルやスイカという現代の利器を言葉遊び風に。こちらは「畑」から限りなく遠い現代。

## 小池　光選

ぼろぼろのジーンズ目立つ若者はきれいに洗いし靴を履きおり　（安曇野市）武田　和子

すみません午後はいますと張り紙し医者に出掛ける雨降らぬ間に　（上田市）松井　律子

普通のこと出来るしあわせかみしめて今日一日が暮れてゆくなり　（長野市）北沢　京子

せんせいよりたいせいくんはちからある　息子が友の強さを語る　（松本市）堀内　悠子

夜の九時介護施設は灯り消す聖樹のイルミネーション残し　（千曲市）上原　博司

男湯は口べた無口ばかりなり壁の向こうは祭りのようだ　（小川村）伊藤　宗善

さっきまで雪が舞ってた様子見に障子を開けると満天の星　（上田市）田中美保子

三歳の春の髪切りし父は今八十三歳我が髪切る　（小諸市）池田　真弓

逃げ出した我が飼い犬は隣人に抱かれ戻る気まずい顔して　（佐久市）小泉　英介

雪国の友のリンゴを食ぶるときリンゴにそそぐ愛を思へり　（上田市）甲田　隆登

佳作

我が牛は器用貧乏そのものであちこちかじりて生き延びてをり　（長野市）小宮山文雄

聖書のビラぶっきらぼうに渡されぬ信号待ちの師走の駅前　（長野市）千花　麗泉

選評

第一首、現代の若者をよく観察している。たしかにズボンには穴があいているが靴はきれいだ。わたしと逆だ。あれもおしゃれのひとつ。第二首、1人暮らしの方。家を空けるときは玄関に張り紙をする。宮沢賢治が張り紙して畑仕事していたことを思いだす。第三首、ごくつつましい歌だが、実感がこもっている。かみしめて、というところがよい。普通のことができるのはしあわせなのだ。